

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

改正中庸新說

口 12
276
1

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

改正中庸新說

口 12

266

口 12
276
1

文正中肅新說序

卷之三

卷之三

道之精以修身其緒餘以治國家其土苴以治天下快哉其言之也然詳內而略外貴己而殘物其非聖

人皆審矣程子曰天地萬物之理無獨必有對每
中夜而思不知手之舞之足之踏之程子賢儒食前
方丈侍妾數百必非所以爲樂其他遠方朋來中四
海而定天下如此之類多矣今乃置而不言專稱樂
於此非見道之明講學之精豈能如此乎蓋仲尼之
門其高足多匹夫也然問爲政問治國比比皆是仲

尼亦取行已有恥不辱君命者爲士之上等其止族
黨稱孝弟者退居其下然則聖門之學豈隔閔內外
輕重人已以爲道乎故大學說明德必以新民承之
中庸說率性必以位育繼之嗚呼是吾儒教之所以
大而能博也會津雨耕翁斥異端而闡正學平生以
朱子忠臣自居其來江都挾所著書環謁名儒亦過
聽詣余今又嫌朱說猶有染汚老禪者其位育節章
句以於人己內外間猶有所偏重遂謂爲異端狂瀾
生風爲述一書痛切言之譽譽謗謗欲爲其諍臣可

謂勤矣朱子之賢必不喜人之佞己則焉知其不欣
然於九原之下邪讀者或誹以爲多憂過慮而翁不
顧者有以乎哉嘉永七年後七月嶺南學人保岡孚
元吉甫識

口陳

和焉無有傳信程朱學と神聖性理學の中後後、荀子傳焉。而
儒學の上道教を除くお葉落くせりび及く一統の大慶至極矣。
序總要今以舊く流布ふ仕業六基孟紳士と愚蒙傳至伏久ハ
佛法并吳學比較從障礙傳すハえども上と下と並んで既又深く
因通傳ゆハ也様学二窟幸うて不動の義教多おきて自吳學者伏
至處育合奕入て根授土產て以ゆ。吳說を唱に實を傳承と奉る
其能あ能一經を以て全體中庸中後後も大學と曰承そ修定新
民正義の三総綱を以て教をお達する以上中後後中庸の二五ハ大
學も一等も尚く學生傳大學ハ止玉真一総綱の名義をあつて解

程朱はもとより切支とハせきとを中庸中庸のあめハモ切支を承
取リるせきと中庸の至教とお見てゆき今以てゆきお承る所等ハ
おほの画り中庸章句大學のめく修道新民正義の文味を承
て唯磨正義の至統心法の意を以て獨善性情を反詠して極致と
推えヌ多大服を只第一已身上のひ引附と取て却る佛氏の爲
為援援助の注解の折お取、自儒主す極意折原の中庸と至るハ
結句佛氏よりふれひて教の如くお見ゆ佛氏の注解も尚お接
种儒の至る所一切の説教へ皆以て佛氏の内に附屬以て只獨佛氏
のミセ教は統寧也の折中身を以て上方折と奉向と承る
傳記に於ては是學の後ハ程朱れ止學論序及び一の統根接をもつ
傳記に於ては是學の後ハ程朱れ止學論序及び一の統根接をもつ

而アロ寔々奉る宋儒、佛氏、劉、獨善の心性學と排斥して種族後接
後も博起す事と奉り承之事の意味で、方程と左降おぞく右後世つら
とも多く正學源の傳記後で程朱の生涯精力とは竭され角再興ヒ與
正學も極意後總の中庸並る又て否塞の及が、詮計せ止ム無欲妄
妄房お育得、而色して事あること詮語は與正學を以て中庸太翁
君也侍と申言す者有之、是ハおほに上画大學同折、ニ經綱を達て止上大學
せし止正學の切支解釋とあるを詮語は論無侍左翁ハ修道新民の二事
天地陰陽日月水火の如く双方持合て中和立育の極致止正學を即と後東も
奇難旨に坐する儒佛のあ教、亦は圓底う抜羣おまく底脚もおま
ヤハルモ佛氏の方於ても坐してたゞし傳記、天也自然の理以ひ陰陽化

の切開を以て生て、自月星辰也、至て山川草木人等ハ君臣父子ト凡天
地也、決而福之の物せし、皆財物也、而流り度易際限もせし、則津
は、是れ修道教氏の二事、財物財産也、傳すて傷也、即チ天也、以法則、以
天地の大徳生との理を因る、既絶人世の大傷を破つ福除私陽沈漏
して罪を天地鬼神にゆる為、神聖の所建主と承認也、根源極致の中
庸も三綱領、傳も以て、意味と心得きうる、猶、以身ハ掌席の文
書一程因意の事、お弁えやくて傷佛の教ハ根深きう極す、
泥の重ひ五色、後進を承接う侍たて是學業も朱墨ノ尉ドロホモ
不參まく、是文章のニヨミハ仁を而て性の本体、復ヒアリ以筆て坐め
ま、生氣を蘊藏の處、ヒト取説語、仲の仁義浅論、通私欲を克

治、本心の徳を全、擴充保持す、是若オの標準、云々、而大抵
是學業ハ、方等の云仁徳性說を傳メテ、アリテ、又起り種々要論、教説、
を唱出、世々或モ、民を歎き仁義を充塞、て物體をも、蘊藏と詠
傍歌屏以テ、後學業を教説曲渙、陷溺仕義と嘆息痛恨甚矣、
至る事仁を有當スルト、是のより、唯論語のニ、限つ教す、が、
而後伝て、更詳の事、アリ、舜禹傳、更比執中を始、掌編も、中医後
の教、事と皆以て私欲を克治、本心の徳を全すて、性の本体、復、
意味と定仕る早急、患皆於仲仁義の程集説、一物、仲義論、
伝左の、是を以て、唯論語のニ、而、是を以て、是學の統疑惑を
生、一己の私見を以て、被是ヤキニ、うふと、要古の如く、掌編をも、以

三

征出を以て言事疑念をもじし迄も朱學一定の仕 中庸後卷 离の執
教子の仁と同様も事 中庸後卷 教義大學 依し馬解の量庸說は事句の的
敏恕ハ人を多殊そ仲ちの仁と同様も 依し馬解の量庸說は事句の的
有ふ仕ゆれぬ事句をもいぞやう裁若培之の意を以てハ押上ナ郭仲
素也經卷本体の說愈々固丈まとお尋一端もう御少少とを序、右書
馬解卷板との以テ夢く著る(ち)に至後志教ニ當て者右多指也
何卒口熟後主と爲て心の盡の義ハ以教論ヒ取て大度玉櫻を及
追成也而御膏代と義ハ止ともせん未だ其の後也子文化大とお定
ナと定ば審時と當て經卷掌と老佛矣是掌との是非形色比辨既と
如てお尋て西掌不易其大經とア義一室を併てハ更に以て事の財を取
可也一念かと雖も無を寢食ともおわき矣直痛欲不至、肩背苦甚

忘却せしむれ過語せらばに既に空氣へ上りて其事は止
朱學諸先哲の朱學編著之處也其學之本源を被り而其の編
力多か可也然れど朱子の傳授被於心猿意馬の早竟今以朱
家ニ傳せば其事は亦多寡漏れ付矣と考へ多死て

又より素勗ハ天命の時、國有する所徳を主として、那氏を含む事ある
自分の太末の中とせんがんを走きの和と自然のあらわしあがれす中和を
と連属して吾性情の徳と云。唯一已の身上に及ぶて吾身を丈夫の天地も
物徳育の功效ヒ取る却て佛氏の方にてばかりかにじと亦家つくりて
儒教の極至中庸と學究の程、ひしの程、又奚浮若ハ吾性情をとて家
相處の心性を掌て佛氏、矜安お取とて甚嬉ひ以テテテテテテテテテテテ

がまくは唯新民の三事にて統一聖人の教化がもれ禦教範圍の中和と連属
しテ先代の身上の推及を度く善民一統の位育立説して事句を佛
民傳の福善の心性をもて御傳傳ひ先哲教説の如く我身上の三財一代
の身上の三財にて唯一意旨焉が連属徳中和せんとお詫び通我人の事
方おもしゃくすれど其事は二十ニ年の中和をもとハ即チ教中の事にて
是ハ一己の才と大本の所徳の止無事、以て其身が丈ヶの位育、お詫び^是其事
お詫び傳教中の才かの事、又人情の性をもとハ即チ教中の事にて其身の
事を推進し、新民の止無事、以て其身が丈ヶの位育、お詫び^是其事
是ハ其事の才とお詫び傳教中の事、又人情の性をもとハ即チ教中の事にて
の事をのこりお詫び傳教中の事、又人情の性をもとハ即チ教中の事にて
ゆく自信ある人の世界中一統位育の切葉統統の立傳を以て其事にて教中

知天地位焉新物育焉トアリヒキも早競老莊晏燭の新民の事業
かくくに唯一己の福善説をお唱て不宗教を御傳傳形說淫辭を以防
きみるときお見て更方とも之を以勘考傳るべし序事の出来ゆく却て種
の是役も云擧起弊塞ひて今以中庸の本旨ゆくお詫び事も莫要歟
麥車馬力舟車云取極むし盡業も通大學同拾三編復お建へ
せ一中庸位焉の聖事もお叶ひ上佛氏吳學業も危角也多數る
矣、朱子も一吸う仕合トを有、

右の如く本文の意、傳文新民を立てて新人の事業立中已發時序
体用程氣機爐煥蒙陽於微大求達を一本乎殊の種と双方併拳取用
やとて既至て聖人政教の位化事、世界中流り普天之下もと解釋

四事と事とおきて更事の事と一己身とを主ふて形良と龜包
を取る吾身かの方一直に序すて大抵未甚在中大本体理性隠微一
本修持の方一直にお取らるゝ又受學若ハ多々切利事業かつきあひ
ら新民を主として一己の身上にかづり立す方先に便の身の方一直に序
して大抵已甚時中直を用氣情斐於る殊新民の方へ至るお取らる
能えずより本件の事とし既ゆる未甚大本の中お立する已甚事との
事行をもつて其せども實を指焉あり事向を福善事とほ義理一彦く事
民一統の修育以下中和極致の切效の事徳とよりかくいれど其事
直掛く中庸を事と以大學經文のか一篇の体要幹也、お建て性を
教を以て總領か配り、又大學八條目の意味を中庸於てハ三條間

約一毫、修持と謂教の條目はそ也若不可須臾離かくの修持に當る
切支ハ二章より十一章とて既中の役と義を不可離の存志者事の為
四事と事又率性之謂きの條目ハ大本連坐の新民、而事と云て四十
二章の大帰きりを合て齊家の端とひき十五章の事子好合兄弟
改禽又母子收及び十六章の鬼神役を以齊家の事と效給を前や
十七章より二十章とて治平の道を效給を申すと事なた大學八條目の意
味ハ中庸の二十章とてお附のをあひて一版も尚正事、二十一章より以下、
あ附の通大掌とせし修持新民為事修持にて止む事の望解新掌
事新掌、事新掌の掌庸掌則、福井侍

但此是と修持の大旨通解の支を節解後ハ事を以ての支ト一事

より十一章を以至而止。又之辨本、并其所画素六章を以中庸
 一章の辨本、お達て二章を以至一の支とし、三章より十一章を以至
 二章の辨本、お達て二章を以至一の支とし、三章より十一章を以至
 一章の辨本、お達て二章を以至一の支とし、三章より十一章を以至
 貴重下ゆべく一章の大旨始終連属して以てお達て。又之辨本、章句
 回末の大旨通解と極みお達て。是亦画素の支と節解説お記す
 事考。幸いに第以第大本を被り、空てお来るまことの教かは善
 き事也。然ひに於て被る事無く、其筆跡もよし新民の如きも、以て是等の事而考る
 もめうけん。従て遠く意を指度して、自歎已亥暮年と云ふ事業
 す。又之辨本、大字固體も云候が、筆跡も本氣も較ひに件
 つましくお朱用と方々極く終り者也。お筆の早亮佛氏是學者も彼等を
 十分に考む。

會津喜久叟刺意于四子書於学庸二篇錯綜
 珊横皆有特解。嘗欲以其所自得而補苴乎洛
 闽二公之間。以排斥釋氏之似真而班足。而一
 楔諸正真為烹。可謂雋已抱奇書。雲游四方。諸
 先生名家往々慇懃勸獎之多裨其剖梓問世
 者而竟弗之能果。叟近日持還里養病。本叩吾
 壶。告別且求贊鼓語于書末。以志雅誼。憇之
 诚溢于面。弗忍却也。夫古聖賢著書立言。以淑
 後之人。後之人讀書。繹言究以潤益乎。歎歟是

其心久相印如印之泥如寒江月不寃妙差異
也且叟既有所自得於二幕書錯綜鉤撲之說
堅說無不如烹則第世空更甚一知己後世豈
更無一亨已斯其書可以未刻矣亦不可以終
不刻矣雖然叟今茲生僅周甲則還鄉養病得
愈後來又何難焉乎哉叟聽此語也欣然一嗟
而去

嘉永甲寅菊有芳華月乙子充復

會津兩耕翁奮乎市井之中以衛道為己任嘗著中
庸說欲補苴朱子所未逮持焉而遊都門歷謁一時
名家以質其說聞者或哂以為迂濶而翁確然自信
不肯少屈其志壯矣抑翁之解經旨未曾拾古人之
唾餘其所發明皆出乎獨得橫說堅說惟意所欲而
於辨斥釋氏似是之非則尤致意焉其有功於斯道
蓋不尠也輓近邊徼告警海防之議方殷於是縫掖
之流各投時好莫不爭而談兵若夫聖經賢傳往往
束之高閣不復省視當今之時矻矻窮經以衛道為
己任如翁其人豈易得哉宜乎世之哂以為迂濶也

雖然孟軻氏不云乎入以事其父兄出以事其長上
可使制梃以撻秦楚之堅甲利兵矣繇此觀之用兵
制勝之本在於化民成俗化民成俗之本在於講經
明道然則海防之要殆將在此而不在彼也世之哂
以爲迂濶於翁乎何校焉翁頃見示其說遂書此言
于卷末而還之

嘉永甲寅良月水府森蔚識于江都礀川邸舍

自東又嘗與歸國客夜飲以義士聞而微醉然自許
無歸方計甚未子貢參寥許酒而醉酒門整轂一聲
令其酒徒十數人中又醉醉方醉方醉方醉方醉方醉



